



修学旅行生との交流終了後のミーティングでは笑みがこぼれる

右上/東京大空襲について説明する八王子市立第三中生徒 右中/事前に準備したリーフレットを交換
右下/流行や方言で交流 左上/当時の食事を説明する中学生の語り部 左下2枚/見送りをする語り部の皆さん

語り部それぞれの思い

小学6年の時に引揚記念館に行って、もっと引き揚げについて知りたいと興味を持ちました。そして、中学1年の3学期に語り部をしていた2つ上の先輩の話を聞いて「私も語り部になりたい」と思い、語り部養成講座を受け始めました。講座の中で印象的だったのはシベリア抑留の話で、いつも一緒にいる家族がいなくなるのはとても悲しくなるだろうなと思いました。

語り部として話すときは、相手に伝わるように気を付けています。特に、ラーグリー(収容所)の食事の様子の展示コーナーでは、引揚記念館の人に教えてもらった「衣・食・住に分けて話す」という工夫をしています。語り部の皆さんと話すこともありますが、抑留体験者の話も聞いて、言葉の重みの違いを感じます。ひとりでも多くの方が戦争を「戦争」という言葉で終わらせるのではなく、戦争の深いところまで知ってほしいなと思います。

若浦中3年
前田和香さん



「引き揚げの史実を次の世代に伝えたい」という子ども達の思いから、語り部の会の中中学生・高校生サポーターが始まりました。子ども達に一番学んでもらいたいのは、家族の大切さです。シベリア抑留の語り部を通じて知った「親が子を思う」という愛情や「家族のためになんとしても生きて帰る」という絆を通じて、家族のことを思うきっかけになればいいなと思います。

説明するときも講座で学んだことをそのまま話すのではなく、自分の言葉にできているサポーターもいて頼もしいです。進学などで一度舞鶴を出てしまっても誇りを持って話してくれたら嬉しいですね。

NPO 法人舞鶴・引揚語り部の会
理事長
宮本光彦さん



戦後13年間にわたり引揚者約66万人を受け入れた「引き揚げのまち」として、引揚記念館を中心に引き揚げやシベリア抑留の史実を後世に継承し、平和の尊さを広く発信しています。その一環で平和学習を通して史実を次世代へ継承するため、市外からの修学旅行などの誘致にも取り組んでいます。

5月18日、八王子市立第三中学校(東京都)の生徒約110人が引揚記念館を訪問。語り部活動をしている地元中学生11人、高校生1人と交流しました。交流では第三中生徒が学んだ東京大空襲の発表をした後、若浦中生徒が学校活動を紹介。両校が事前に用意していたリーフレットを交換した後、館内を語り部の生徒たちが説明しながら見学しました。

見学では、収容所を再現した抑留体験室や抑留者同士がもめないよう少ない食料をグラム単位で分ける食事の様子などを説明。第三中生徒は、熱心にメモを取っていました。また説明が終わると同世代ということで会話も弾み、東京の流行や舞鶴の方

言「ちゃった」などの話題で盛り上がっていました。

東京の中学生を温かいおもてなしの心で案内し、生徒が帰りのバスへ向かう際、語り部の生徒たちが名残惜しそうに笑顔で手を振る姿には、引き揚げ当時の市民に通じる「舞鶴の真心」が見られました。

◆中学生・高校生の語り部
NPO 法人舞鶴・引揚語り部の会には62人のスタッフが所属。毎日午前・午後2人ずつで目印の白いスタッフジャンパーを着て来館者を案内しています。

中学生・高校生の語り部は、引揚記念館の実施する語り部養成講座を受講し、NPO 法人舞鶴・引揚語り部の会のサポーターに登録された生徒たちで構成。登録人数は17人(6月1日時点、東舞鶴高2年生2人、西舞鶴高2年生1人、日星高1年生1人、若浦中3年生8人、2年生4人、福知山市立桃映中3年生1人)。休日や夏休みなどの長期間の休みで来れる日やイベントのときに活躍しています。

引き継がれる 舞鶴の真心